

第10節 美園遺跡 F S K501出土瓦器碗について

小 野 久 隆

1 F S K501

F地区北端部Y=-37,145m、X=-151,400m地点に於けるF S K501は、一部が調査区外の為に全容は不明であるが推定径3~4m、深さ0.3mを測り、円形を呈するものと思われる。土坑は下層の砂層上面に掘り窪まれている。この砂層は、E~G地区にかけて存在し、下層に飛鳥時代の自然河川（古大和川、幅約50m）が流れ、特にF地区は砂層が隆起している。周辺には同時期の遺構として、D S D506、F S D505、F S K501、D S E501、E S E503、D S A501があり、これらの北側に離れてD S D507、D S E502が在り、南側ではG S D501、G S K503、G S E504等と、他に多くの小溝（素掘り溝）が在る。

土坑内の埋土は、大きく上層、中間層、下層の3層に区分され、上層は黄灰色土層（褐色の鉄分が沈着）ないし、暗黄灰色土層（灰を含み、赤褐色の鉄分が沈着）で、中間層は暗灰色粘土層または、黒灰色粘土層である。下層は、暗灰色粘土層（細砂含む）となっている。

上・中間層からの出土遺物は、瓦器片口、瓦器鉢、瓦器碗、瓦器小皿、瓦質土器、土師器羽釜、土師器中皿、小皿の完形品が多く、細片も多く出土し、また須恵器も出土している。須恵器は上層が堆積した後に更に上層の遺物が落ち込んで入り込んだものと推測できる。この土坑の性格、用途を考えるうえで参考となる遺物に、炭、蒟(スサ)、焼けた竹や木片、焼けた粘土塊、獣骨の歯が入っていた。

次に、遺物について、特に瓦器碗の形態について検討を加えたいと思う。遺物説明の項と若干重複するかもしれないが、了承願いたい。

2 瓦器碗

出土瓦器碗の大半は、内面口縁部に沈線は施されず、体部外面には指圧痕が多く明瞭に残されている「和泉型」に属するものである。⁽¹⁾いずれも高台は低く簡単なもので形骸化している。器高が低いものは(F460)3.6cm、高いものは(F465)5.1cmを測る。また口径の小さいものは(F472)14.3cm、大きいものは(F462)17.7cmを測り、器高指数は⁽²⁾23.2~33.6で高台径指数は⁽³⁾24.5~35.7である。

しかしながら詳細に観察すれば更に分類は可能で、大きな目やすとして、暗文と高台に特徴があり、それぞれ2つずつのタイプに分類出来るようである。

先ず暗文の特徴より2つのタイプに分類出来、Aタイプ細い暗文と、Bタイプ太い暗文の2型式である。Aタイプの瓦器碗は、F452・456・457・458・462・468・469・482・547で、内面部に横方向の暗文と、見込み部分に平行線状の暗文を施している。とくにF470、内面体部の暗文は密に施しているが、見込み部分の暗文はやや簡素に仕上げている。Bタイプの瓦器碗はF453・

459・464・465・466・467・471・472・474で、Aタイプと同様に、内面体部に横方向の暗文と見込み部に平行線状の暗文を施している。F 472とF 474は、内面体部の暗文が太く、見込み部分の暗文がやや細く、とくに見込み部分の暗文の間隔が粗いもので、暗文の数も少ない。Aタイプの器高指数の平均値は、28.4で、高台径指数の平均値は、29.6である（1点不明）。

Bタイプの器高指数の平均値は29.9で、高台径指数は28.8である（2点不明）。

次に、高台の特徴より、aタイプ断面形が逆三角形状のものと、bタイプ断面形が、台形ないし方形のものに分類できる。

前者のaタイプには、F 452・455・457・460・461・464・465・467・468・470・471・472・474・476・482・547があり、特に、F 467は高台は他の瓦器碗に比して高くしっかり貼り付けている。F 461の高台は一番低いものであるが、端部が尖っているものである。後者のbタイプには、F 454・456・458・459・475がある。F 454はしっかりと高台を貼りつけている。F 460は他のものに比して高台が一番低く、器高自身も低い。

これら他の特徴以外からも分類が可能のようである。①口縁部が外反するものと、②やや内傾するものと、③そのまま真っすぐに伸びていくもの。①にはF 454・458・459・460・463・469・475・476・482があげられ、②にはF 452・461・462・465・466・470・474があげられる。③はF 456、B 457・464・467・471があげられる。また器高によっても分類できる。

器高指数30以上のもの、F 452、F 454・455・465・467・468・472・475・476、

30以下のもの、F 456・457・458・459・460・461・464・470・471・474・482・

547

高台指数30以上のもの F 452・458・457・460・464・474・476・482・547、

30以下のもの F 454・455・456・457・461・465・467・468・470・471・472・475

3 瓦器碗の年代

F S K 501出土の瓦器碗はいつ頃のものであろうか。それを決定付ける紀年銘の書かれた資料は本遺構より出土していないが、多くの方たちが編年されているので、これらの編年資料にあてはめてみようと思う。F S K 501から出土した瓦器碗はほぼ同時期のものと思われ、白石氏の編年によれば第Ⅲ段階の7型式から8型式に位置付けられる⁽⁴⁾。本遺構で新しい時期のものとしては、F 456・458・460・461でF 458、F 460は器高指数が25以下である。それに近いものとして、F 456・461がある。これらの遺物は白石氏の編年で第Ⅲ段階8型式に比定でき⁽⁵⁾、また橋本氏の編年ではⅢ期に属し、尾上氏の編年ではⅦ期、長原遺跡の編年ではⅢ-2、Ⅲ-3に位置付けられ⁽⁶⁾⁽⁷⁾る。若江遺跡ではi型式に比定できる。また、先の遺物よりもやや古い時期のものとしては、F 465・472・475・454・476・468があげられる。これらの遺物を先の編年に当てはめると、白石氏の編年ではⅢ型式7段階に、橋本氏の編年ではⅢ期に、尾上氏の編年ではⅦ期に、長原遺跡ではⅢ-1ないしⅢ-2に⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾、若江遺跡ではi型式に相当するものと思われる。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

F S K 501出土の瓦器碗の実年代は、若江遺跡の編年を除いて、ほぼ13世紀初頭から13世紀後

半の時期に位置付けられる。若江遺跡の編年では i 型式を12世紀末から13世紀初頭におかれている。

4 まとめ

F S K 501 出土の瓦器碗の時期は、ほぼ13世紀初頭から13世紀後半に位置付けられよう。土坑の性格としては、土坑の壁に焼けた痕跡を確認できなかったものの、瓦器碗の生焼け、焼けた粘土塊、焼けた竹片・木片等が出土していることから、窯跡に近い施設か、もしくは、廃棄留等の施設が考えられる。

この時期の周辺の遺跡としては、すぐ南側に佐堂遺跡が所在し、掘立柱建物跡と井戸が検出されており、井戸内より瓦器碗が検出されている。⁽¹⁵⁾ F S K 501 は恐らく佐堂遺跡に伴うものであろう。美園遺跡より北西へ1.3Km 離れて弥刀遺跡があり、瓦器碗が曲げ物井戸より出土している。⁽¹⁶⁾ また、本遺跡より東へ約1 Km 離れて萱振遺跡があり、本遺跡と同様に土坑が検出されている。土坑内では炭の層がレンズ状に堆積し、焼土塊や木片が検出されている。遺物として瓦器碗、土師小皿等が出土しており、近くに建物跡が検出されている。⁽¹⁷⁾

他の遺跡としては、東大阪市若江遺跡⁽¹⁸⁾、八尾市宮町遺跡⁽¹⁹⁾、八尾市釈迦寺山遺跡⁽²⁰⁾、八尾市金性寺遺跡⁽²¹⁾、八尾市竜華寺遺跡⁽²²⁾があげられる。

今回は、瓦器碗のみについて報告したが、十分に語りつくせなかった。他に本遺跡とともに一括資料として、瓦器片口鉢、瓦器小皿、土師中・小皿、羽釜の遺物が出土しており、瓦器碗についても他の遺構より出土しているものがある。今後、これらの遺物も検討していきたいと思っている。

中河内地域は最近、発掘調査が多くなり、中世遺構も多く検出されている。資料もまた、さらに蓄積されつつあり、希薄であった中河内地域の特色も今後明らかになることであろう。

本文を作成するにあたって、渡辺昌宏、三宅正浩氏の両氏（大阪府教育委員会）には常に御教示を頂き、また、広瀬雅信氏（大阪府教育委員会）からは萱振遺跡について、また米田敏幸氏（八尾市教育委員会）からは宮町遺跡について、弥刀遺跡については、下村晴文氏（東大阪市教育委員会）より御教示を受けた。堺市教育委員会の森村健一氏には中世土器関係の多くの文献資料や遺物を見せて頂きお世話になった。末筆ながら深く感謝致します。

註(1) 橋本久和「瓦器碗の地域色と分布」『摂河泉文化資料』摂河泉文庫、19・20号、1980年。

(2) 器高÷口径×100

(3) 高台径÷口径×100

(4) 白石太郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題」『古代学研究』古代学研究会、54.1969年。

(5) 前掲註(4)

(6) 前掲註(1)

(7) 尾上実「狭山遺跡・軽里遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会、1978.3.

- (8) 鉢木秀典他『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会、1982。
- (9) 勝田邦夫・阿部嗣治『若江遺跡発掘調査報告書Ⅰ(遺物編)』財団法人東大阪市文化財協会、1983。
- (10) 前掲註(4)
- (11) 前掲註(1)
- (12) 前掲註(7)
- (13) 前掲註(8)
- (14) 前掲註(9)
- (15) 三宅正浩氏より教示。
- (16) 下村晴文「弥刀遺跡発掘調査概報」『東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集(1980年度)』1981、東大阪市遺跡保護調査会。
- (17) 広瀬雅信氏より教示。
- (18) 前掲註(9)
- (19) 米田敏幸他『宮町遺跡発掘調査概要Ⅰ』八尾市教育委員会、1982。
- (20) 『八尾市文化財調査報告7 昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市教育委員会、1981。
- (21) //
- (22) //